第十七講　実践演習(7)『白露』

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

夜もやうやう明け方近くなれば、「①明け離れなば、便なからん。暗き程に」と思ほし急ぐも、そぞろに心あわたたしう、この頃はさもうち解けても a参り給はで、いとめづらかなるさまの御対面に名残留まる心地し給ひて、とかくうち嘆きつつやすらひ給ふ。女も、なのめならずもの苦しきやうにし給ふを、いとふりがたく心苦しくて、またしばし語らひ給へるに、鳥もしばしばうちしきり、物の隈々など、いろ白く隙見ゆれば、杉子など起き出でつつ、「あな［X］。出でさせ給へ。②人もこそ見れ。はやはや」と諫め聞こゆ。からうして御直衣など引きつくろひて、出で給ふを、女も見奉り送らんとてにや、［Y］の帷子少し押しやりて、とばかりゐざり出で給ふ。御寝くたれのはらはらと紛ふ筋なくこぼれかかれる［御宿直姿］のしどけなげなるに、菊襲のなえたるに、御裳ばかりさすがに引き掛け給へる御もてなし、ねびれたる御顔つきしも、まして匂ひやかにめでたきを、君も立ち止まりて、返り見給へる様の、尽きすべくもあらぬを、絵にも書き留め〈1　まほし〉。御指貫の裾、気色ばかり b取りて、霜深き庭の草葉を分け給ふ程、御袖もいたうしほたれまさる。妻戸の口少し開けて、杉子の君のぞきゐ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

たれば、「起き別れ行くしののめの道は、かく露けしとも、まだ慣らはぬを」とて、

「いかさまの世々に結びし契りにてかかる浅茅(じ)の露を分く〈2　らん〉

悪ろかめれど、かく聞こえさせよ」と宣へば、やがて参りぬ。御轅(ながえ)さし寄せて、召さする程に、追ひて、

吹きまよふ風の心も白露は結びもあへず消えや果つべき

帰りおはします道の程にて、日もさし上がりぬ。かかるはしたなき御濡れは、朝霧にも紛るる方なかるべきが、いとすべなさに、御乳母(めのと)の少将と聞こゆる、この御通ひ路の中宿りければ、それがり忍びておはしつつ、御装束改め替へなどして、日暮れかかる程に殿におはしたり。左衛門佐、「御前に求めさせ侍りけるを、『太政大臣の御召しありて、渡らせおはしましし』と申し侍りつ」と聞こえたれば、A急ぎ参り給ふ。まづ、母君の御前に候ひつつ、よろづ御気色賜り給ふに、中納言も渡らせ給ひて、何くれと御物語聞こえ給ふ程に、夜も更けぬ。Bかくあながちにまつはさせ給ひて、一日見奉らせ給はぬをだに飽かずいみじきことに尋ね惑はせ給ふままに、おのづから心に任する歩きもかなはず。「③今日は御文をだに奉らで、いかにしてかは暮らさるらん」と、いとうしろめたう、目も合はず思ひ明かし給ふ。明くる日は、「いと疾(と)くまうでん」と、暮るるを待

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ちかねつつ、ながめゐ給ふに、六日の御物忌みとて、いたう慎ませ給へば、また言ふ甲斐なくいたづら臥しにて、籠りおはす。

（『白露』上）

（注）杉子…女君の亡き乳母の娘。女君の侍女。
左衛門佐…男主人公の後見。
中納言…男主人公の父。

問一　波線部①～③の口語訳として最も適当なものを、次の中からそれぞれ選べ。

①　明け離れなば、便なからん

ア　夜が明け二人が別れるとどうしようもなくなるだろう。
イ　夜が明けてしまうと帰る手段がないようだ。
ウ　朝になり別れると気持ちも離れるだろう。
エ　夜が明けてしまったなら不都合だろう。
オ　朝になってしまったなら手紙も送れないようだ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

② 人もこそ見れ

ア　お姿を人が見ると大変です。
イ　人の姿も見えるころになりました。
ウ　女君の姿を一日だけでも見てください。
エ　あろうことか、私の寝起きの姿を見るなんて。
オ　お姿を女房たちも見たいのです。

③ 今日は御文をだに奉らで、いかにしてかは暮らさるらん

ア　今日はお手紙さえくださらないで、わたしはどのようにして一日を暮らしたのだろうか。
イ　今日はお手紙だけ差し上げるもののお訪ねはせず、あの方がどのように一日を暮らしたのか定かではない。
ウ　今日はお手紙さえたまわらず、あの方はどのようにして暮らしておいでであろうか。
エ　今日はお手紙だけは差し上げたがお返事がなく、これから私はどのように暮らすことができようか。
オ　今日はお手紙さえ差し上げないでいたが、あの方はどのようにしてお暮らしだろうか。

問二　点線部ａ～ｃの行動の主体として最も適当なものを、次の中からそれぞれ選べ（同じものを何回用いてもよい）。

ア　女君　　イ　男主人公　　ウ　杉子　　エ　少将
オ　左衛門佐　　カ　太政大臣　　キ　母君　　ク　中納言

ａ＝　　ｂ＝　　ｃ＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　空欄 X に入れるのに最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　かま　　イ　わりな　　ウ　かしこ
エ　うしろめた　　オ　めでた

問四　空欄 Y に入れるのに最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　半蔀　　イ　格子　　ウ　几帳
エ　脇息　　オ　屏風

問五　御宿直姿とあるが、その描写として**不適当**なものを、次の中から選べ。

ア　柔らかくなった菊襲の装束を身につけている。
イ　裳は忘れずに着用している。
ウ　少し膝行して姿を見せて見送っている。
エ　幼さの残る美しい顔つきをしている。
オ　寝て乱れた髪がほつれなくかかっている。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　助動詞１・２の本文中の文法的意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ選べ。

ア　現在の婉曲　　イ　推定　　ウ　仮定
エ　希望　　オ　現在原因推量　　カ　適当

１＝　　２＝

問七　二重傍線部「轅」の説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　人が運ぶ駕籠（かご）の一部。
イ　馬の背に取り付ける鞍（くら）の一部。
ウ　牛車の前方に突き出ている長い棒の部分。
エ　牛車の牛をはずした時、棒の部分を支える台。
オ　乗車中、人が足をかけておく馬具。

問八　傍線部の和歌の説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　先の和歌に追加して、女君の心の奥を理解できない哀しみを詠み上げた男主人公の和歌。
イ　出立しようとする男主人公に対して詠んだ、我が身を風の心も知らず消えてしまう露になずらえた女君の和歌。
ウ　道中の草葉に置く露を詠みながら、実は男主人公の帰路を案ずる気持ちを詠んだ女君の和歌。
エ　女君から受け取った和歌に対する返歌という形で、隠しきれない恋心を打ち明けた男主人公の和歌。
オ　「浅茅の露」という歌語を承けて「白露」を持ち出し、女君の美しい姿を比喩によって表現した男主人公の和歌。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問九　傍線部Ａ「急ぎ参り給ふ」の理由として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　太政大臣がお呼びであることを、左衛門佐より伝え聞いたから。
イ　少将のところに立ち寄って着替えたことで、予定通りの行動がとれなくなっていたから。
ウ　左衛門佐と話し込んでいたため、母の急用に応じられなくなりそうであったから。
エ　日暮れまでに太政大臣の所に行かなくてはならなかったから。
オ　左衛門佐が、女君を訪問していたことを両親には誤魔化していてくれたから。

問十　傍線部Ｂ「かくあながちにまつはさせ給ひて」の説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　男主人公が、片時も女君への恋情を忘れないことを表現している。
イ　出家の妨げとなる人たちが、男主人公の周りには複数いることを示している。
ウ　両親が、あれこれと世話を焼き、男主人公の身辺から離れない様を表現している。
エ　お付きの者が、女君を訪問することを妨害するために、男主人公の身辺にいることを表現している。
オ　男主人公が、立身出世の志と女君への愛の板挟みになり、煩悶（もん）していることを示している。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十七講　復習問題

①「生まれおちなばすてん」の口語訳として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　生まれたら、すぐに捨ててしまおう
イ　生まれ落ちたので、捨ててしまおう
ウ　もう生まれてしまったので、捨てられない
エ　生まれてくるのであれば、捨てはしない

②「一日のやうにもこそあれ、かたはらいたし、と思ひつつ」の内容として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　先日のように、兼家が明け方に手紙を持ってきてくれたらうれしいし、周りの人にも誇らしいと思いながらも
イ　先日のように、兼家が家の前を素通りしていったのでは困るし、はたの目も気になると思いつつも
ウ　先日のように、兼家が縫い物を頼みに来たのでは気の毒で、横で見ていてみっともないと思いながらも
エ　先日のように、兼家とののしり合いになったらいやだし、腹痛がすると思いつつも

③「女、もの聞こえむにもほど遠くてびんなければ、扇をさしいでて…」の傍線部の意味として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　どうするか決めかねて
イ　具合が悪いので
ウ　手が届かないので
エ　他に人がいないので

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　「いづ方へか行きぬらむ」の文法的説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　指示代名詞＋格助詞＋疑問の係助詞＋動詞＋完了の助動詞＋現在推量の助動詞
イ　指示代名詞＋格助詞＋反語の係助詞＋動詞＋完了の助動詞＋伝聞の助動詞
ウ　指示代名詞＋格助詞＋疑問の係助詞＋動詞＋打消の助動詞＋婉曲の助動詞
エ　形式名詞＋格助詞＋反語の係助詞＋動詞＋完了の助動詞＋伝聞の助動詞
オ　形式名詞＋格助詞＋疑問の係助詞＋動詞＋打消の助動詞＋現在推量の助動詞

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十七講　模範解答

問一　①エ　②ア　③オ
問二　a イ　b イ　c イ
問三　イ
問四　ウ
問五　エ
問六　1 エ　2 オ
問七　ウ
問八　イ
問九　オ
問十　ウ

〔現代語訳〕

夜も次第に明け方近くなったので、「夜が明けてしまったなら、不都合だろう。暗いうちに」と思いなさって急ぐのも、なんとなく慌ただしく、この頃はそれほどゆっくりとも（男君は）参上なさらないので、たいそう珍しい様子での逢瀬に名残が残る気持ちがなさって、なにかと嘆きながら帰りかねていらっしゃる。女君も、並々でなくつらそうにしていらっしゃるのが、たいそう振り捨てがたく気の毒で、またしばらくお話しなさっているが、鳥も何度も鳴いて、部屋の隅々など、たいそう明るくすき間が見えるので、杉子などが起き出してきて、「ああ、困ります。お帰りください。お姿を人が見ると大変です。早く早く」と諫め申し上げる。（男君が）ようやく御直衣などをひき繕って、出なさるのを、女君もお見送り申し上げようということであろうか、几帳の帷子を少し押しやって、わずかに座ったまま出ていらっしゃる。寝乱れた御髪がはらはらとこぼれかかっている御宿直姿が無造作な様子であるが、菊襲ねの衣装が萎えたのに、御裳だけはそうはいっても引き掛けなさる身のこなしや、大人び

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ているお顔つきが、いっそう映えるように美しいので、男君も立ち止まって、ふり返って（女君を）ご覧になる様子が、（言葉に）尽くしようがないので、絵にも描き留めておきたい。御指貫の裾を、（男君が）少し持ち上げて、霜深い庭の草葉を分けなさるとき、お袖もますます濡れる。妻戸の口を少し開けて、杉子がのぞいていたところ、（男君は）「起きて別れて行く明け方の道は、このように濡れているとは、まだ慣れていなかったよ」とおっしゃって、

「いかさまの…＝どんな前世に結んだ契りが原因で、このような浅茅の露を分けるのだろうか。

下手なような歌だが、このように（女君に）申し上げよ」とおっしゃるので、（杉子は）すぐに（女君のいらっしゃる奥に）参上した。御轅を寄せて、用意させなさるところに、追って（お返事がある）、

吹きまよふ…＝吹きまよう風の心も知らずに、白露は結ぶこともできず消え果ててしまうのだろうか。

帰りなさる道の途中で、日も上がってしまった。このようなみっともない（露で）濡れたのは、朝霧の中でも隠すことができそうもないが、どうにも仕方がないことなので、御乳母の少将と申し上げる人が、このお通いになる路の途中に家があるので、その人のもとにこっそりいらっしゃって、お召し物を着替えたりして、日が暮れかかる頃に自邸にお帰りになった。左衛門佐が、「（ご両親が）側に来るようお呼びでしたが、『太政大臣のお呼びがあって、（そちらに）いらっしゃった』と申し上げておきました」と申し上げたので、（男君は）急いで参上なさる。まず、母君の御前に伺って、ご機嫌をうかがいなさると、父の中納言もおいでになって、あれこれとお話を申し上げなさるうちに、夜も更けた。（両親が男君を）このように強引におそばにお引き留めなさって、一日でも見申し上げなさらないことをさえもの足りなく大騒ぎしてうろたえてお探しになるので、（男君は）自然と勝手な外出もできない。「今日はお手紙さえ差し上げないでいたが、（女君は）どのようにしてお暮らしだろうか」と、（男君は）たいそう気がかりで、一睡もできず夜を明かしなさる。翌日は、「たいそう早く出かけよう」と、（日が）暮れるのを待ちかね続けて（男君は）物思いにふけっていらっしゃったが、六日間の御物忌みということで、（両親が男君に）きびしい謹慎をさせなさるので、また仕方なく寂しく独り寝をして、（邸に）籠っていらっしゃる。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十七講　解答解説

〔解説〕

① 「おちなば」の「な」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形。「未然形＋ば」は順接仮定条件で「～ならば」と訳す。「すてん」の「ん」は、助動詞「む」（ここでは「意志」の意味）。打消「ず」ではないので気を付けること。よって、正解はア。

② 「もこそ」は危惧の用法で、「～したら困る・大変だ」の意味。「かたはらいたし」は重要単語で、「みっともない」「気の毒だ」「（はたの人が自分をどう見ているかと思うと）恥ずかしい・きまりが悪い」の意味。よって、正解はイ。

③ 「びんなし」は重要単語で、「具合が悪い」「不都合だ」「気の毒だ」の意味。よって、正解はイ。

④ 「行きぬらむ」の「らむ」は、ｕ段に付いているので現在推量の助動詞「らむ」。「ぬ」は「らむ」の上にあることから、終止形。終止形が「ぬ」であれば、完了の助動詞「ぬ」。よって、正解はア。

〔解答〕

①　ア　　②　イ　　③　イ　　④　ア

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。